真珠湾へ…戦争したくない

空母「飛龍」砲手 故木下さん(玉名市)

揺れた胸中 手記に

日米開戦80年

1面から続く

太平洋戦争の経験を手記にまとめた玉名市伊倉の木下末男さん(昨年3月死去)は1938年、18歳で佐世保海兵団(長崎県佐世保市)に志願して入隊し、主力航空母艦「飛龍」の砲手となった。飛龍は、真珠湾を攻撃した海軍機動部隊の一翼を担っていた。

木下末男さん

37年から続いていた日中戦争を巡り、撤退を迫る米国との交渉が決裂。圧倒的な国力の差から、開戦には懐疑的な声もあった。木下さんは手記に当時の複雑な心境を「米国とは戦争はしたくない」「されど無為に屈服はできない」と吐露した。真珠湾に向けて択捉島を出港した日、艦は大しけに揺れ、深い霧が航路を覆っていたという。

「多大の戦果を期待、無事の帰還を祈りつつ」。41年12月8日未明、爆音を残して飛び立つ戦闘機を甲板から見送った。奇襲成功を告げる「トラトラトラ」の電文が伝わると、乗組員は一斉に万歳。ただ、米空母に大打撃を与えることはできず、「奇襲とはこんなものか」「命があればやはり一日でも早く内地に帰ってみたい」と考えていた。

42年6月、木下さんはミッドウェー海戦に参加。日本が主力空母4隻を全て失い、敗戦への転換点となった激戦だった。猛攻にさらされた飛龍は「薄暗い前甲板にはあちこちに人が倒れている」ような状態。味方の戦艦に必死で乗り移ると沈む飛龍の姿が見え、「知らず涙が溢れた」。

敗戦を知った場所は西太平洋のトラック島。手記の最後は無謀な戦争に突入したことの後悔と戦死者を鎮魂する気持ちを込め、「かような戦争が世界中に起こらない事を祈らずにはいられない」と締めくくった。

2004年に書き上げた手記は冊子になり、地元まちづくり団体代表の松本重美さん(75)=玉名市伊倉=は朗読会を開いた。「開戦時に従軍した人のほとんどが亡くなっている。地域の歴史として手記を残していきたい」と願う松本さんは、小学生の平和教育にも手記が生かせないかと考えている。

木下さんが家族に戦争体験を語らなかった理由を、次男の正博さん(63)=熊本市中央区=は「自分だけ生き残ったことへの葛藤も大きかったのでしょう」と推し測る。一方で手記公表は「よかった」と漏らしていたという。「伝え残すことが報いになると思ったのでしょう」。正博さんは、長かった父親の戦後に思いをはせた。(堀江利雅)

木下末男さんが残した手記を手に「地域で語り継ぎたい」と語る松本重美さん＝1日、玉名市

真珠湾攻撃　1941年12月8日(現地時間7日)、旧日本軍が米ハワイ・オアフ島の真珠湾で、米海軍基地や艦隊を戦闘機などで奇襲攻撃。太平洋戦争が始まった。日米両国は日中戦争や日独伊三国同盟を経て対立。日本が仏領インドシナ南部に進駐すると米国は日本への石油輸出を全面禁止し、日本は開戦に踏み切った。真珠湾攻撃で米側は戦艦4隻が沈没し、死者・行方不明者は2403人。日本側は航空機29機を失い、死者は55人。

ズーム

上村真理子さんが寄贈する予定の資料

高谷和生さん

上村真理子さん

戦争と平和考える資料館 熊本市に構想

太平洋戦争の開戦から80年。当時を知る人たちの証言を聞くことが年々難しくなる中、戦争遺跡の調査・保存を続ける県内の有志らが、戦争と平和について考える資料館を熊本市に設立する構想を進めている。来春にも運営主体となる法人を発足させる考えだ。

有志は市民団体「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」の高谷和生代表(67)=玉名市=や県内の研究者、市議ら。資料館の仮称は「くまもと戦争と平和のミュージアム」としている。

資料館には1945年の熊本大空襲や戦争遺跡に関するパネルのほか、軍国少年の育成につながった教科書や玩具などを展示予定。約30年前から集めた資料を寄贈する宇城市の元高校教諭、上村真理子さん(68)は「迫力ある生の資料を若い人にも見てもらい、関心を持つきっかけにしてほしい」と呼び掛ける。

設立資金には寄付金などを充てる予定。行政にも協力を呼び掛ける。高谷代表は「目指すのは県内の戦争と平和について多角的・包括的に学べる資料館。市民の手元にある資料を積極的に預かり、調査する場にしたい」と抱負を語った。(伊藤恩希)